

第 72 回 国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 銀賞

東京都立国際高等学校 3 年

ケラー 麻璃衣

課題②

あなたが国連の総会議場で自由にスピーチすることができるとしたら、何を訴えるか。

副題

敵ではなく人として

もし私に国連でスピーチする機会があったなら、私はフィギュアスケートの競技生活について話すと思います。メダルの数や演技内容について語りたいわけではなく、更衣室の空気やライバルとの緊張感、そしてその中で他の選手たちを敵として見ていた感情を伝えたいのです。

八歳で大会に出場してから、私は敵という意識を持ち始めました。勝つことが最も評価される環境の中で、あの子に負けてはいけない、あの子は脅威だ、と思うようになりました。周りの噂話、批判、不公平感が私を疑い深くし勝つことを最優先するようになったのです。

特に印象に残っている選手がいます。八歳から十四歳まで毎年同じ大会で競い、いつも表彰台並んでいましたが、一度も言葉を交わしたことはありませんでした。彼女は私の中で単なるライバルではなく、敵でした。十二歳の大会で、私はジャンプに失敗し、表彰台を逃しました。得点発表を待つキス&クライで、オンライン配信用のカメラに映される私の眼には涙が浮かんでいましたが、コーチは無言で隣に座っていました。その後、カメラから離れたときにコーチは私に「今あの子たちに弱みを見せた。心にヒビが入れば壊されるよ。」と言いました。その瞬間から、私は人前で涙を見せないようになり、勝つことに執着し続けました。ところが、ある大会でその選手が同じように涙をこらえている姿を見たとき、私はハッと気付かされたのです。私は自分と同じように努力して苦しんでいる人を、ただ敵として見て、その見方が無意識に植えつけられていたことに気付いたのです。

敵味方に分ける視点は、子どもの世界やスポーツの場でも育ちます。勝つことが重視される中で、他者とのつながりや思いやりは、甘さや弱さとして見なされがちです。この視点は、社会全体に広がり、戦争や対立を生む原因になります。国籍や宗教でどちら側かを判断し、対立が深まるのです。現在も、世界の

多くの場所で同じような対立が続いています。例えば、イスラエルとパレスチナの問題などです。政治的対立や歴史的背景も重要ですが、それと同じくらい重要なのは、人々がどんな価値観を与えられ、何を信じて育っているかです。家を失い、家族を亡くし、偏った情報しか与えられなかった子どもたちは、やがて怒りや恨みを当たり前として受け入れ、それが彼らの世界の見方になります。

歴史を振り返ると、ホロコーストやルワンダの虐殺も、いきなり暴力が始まったわけではなく、最初彼らは自分たちとは違う、彼らは危険だという刷り込みから始まったのです。だからこそ、真の平和は政治だけで築けません。人と人との関係、共感、そして異なる価値観を受け入れる環境づくりが必要です。特に子どもたちが自分と違う存在を脅威ではなく人として見られる社会を作ることが大切です。憎しみは心に深く残ります。根本を変えない限り、表面的に平和を語っても、本当の意味では変わりません。

もし私が国連でスピーチをする機会を得たなら、こう訴えたいと思います。「国を思う気持ちやナショナリズムは、他国を否定することとは別です。他国を否定することで得られる強さは、真の強さとは言えません。」

本当の平和には時間がかかります。しかし、私はもう、子どもたちが他者を恐れることを前提に生きる世界を見たくありません。すべてを一度に変えることはできないかもしれませんが、どんな物語を未来に残すかは私たち一人一人が選べることです。今世界に本当に必要なのは、勝ち負けではなく人と人とのつながり、そして平和なのです。